

氏名(本籍)	瀬戸美奈子(北海道)		
学位の種類	博士(心理学)		
学位記番号	博乙第2503号		
学位授与年月日	平成22年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	中学校・高校の援助チームおよび援助システムにおけるコーディネーションに関する研究		
主査	筑波大学教授	教育学博士	新井 邦二郎
副査	筑波大学教授	Ph.D	石隈 利紀
副査	筑波大学准教授	教育学修士	水本 徳明
副査	筑波大学教授	教育学博士	服部 環

## 論文の内容の要旨

### (目的)

近年、不登校やいじめなどの問題の深刻化や、特別支援教育への関心の高まりに伴い、複数の援助者による援助チームの必要性が強調されている。援助チームが効果をあげるには、援助活動や方針の調整、援助チームを支えるシステムの調整を行うコーディネーターの活動が鍵を握っている。本論文は「援助システムを構築するにはどのようにコーディネーションを行えばいいか」という実践上の問いを解明することを目的とする。

### (方法)

本論文は主として、中学校・高校の教師を対象とした調査法を用いた。序章は問題の所在、第1章は本研究の理論的背景、第2章は研究の目的と基本概念の定義について述べた。第3章は中学校と高校を対象にして、コーディネーション行動とその基盤となっている能力および役割権限を調査した。第4章は中学校と高校を対象にして、個別援助チームのコーディネーション行動が援助チームの有用性に与える影響について事例研究を行った。第5章は中学校と高校を対象に、システムレベルのコーディネーション行動が援助システム活性化に与える影響についての事例研究を行った。第6章はそれまでの結果から生成された仮説を数量的調査によって検討した。まずコーディネーション行動尺度の簡易版を作成し、その妥当性と信頼性を検討した。次に中学校と高校を対象にして、コーディネーション行動が援助チームの有用性、援助システム活性化に与える影響を学校要因との関連から検討した。第7章は本研究をまとめ、複数でコーディネーションを担う場合の有効な連携のあり方やコーディネーター研修について具体的な提言を行い、本研究の限界と課題について述べた。

### (結果と考察)

本論文の主な結果は次のとおりである。まず、コーディネーション行動は特定の子どものための個別援助チームレベルと、学校全体の子どものための恒常的な委員会であるシステムレベルの二つの構造を持つことが明らかになった。中学校、高校のいずれにおいても個別援助チームのコーディネーション行動は説明調整、保護者・担任連携、アセスメント・判断、専門家連携、システムレベルのコーディネーション行動はマネジ

メント促進、広報活動、情報収集、ネットワークから説明できた。次に、コーディネーション行動を支える能力・権限は、中学校においては、状況判断・援助チーム形成、専門的知識、話し合い能力、役割権限の4因子で説明できた。高校においてはコーディネーション能力・権限は5因子構造であり、中学校と高校は異なる構造を持つことが明らかになった。また、①援助チームメンバーの方針、ニーズ、抵抗感を判断する、②援助チーム会議を開催し、参加者が話しやすい雰囲気を作る、③援助方針を判断し、今後の見通しを説明する、④専門機関との仲介を行うという個別援助チームのコーディネーション行動が援助チームの有用性に影響を与えることが示唆された。さらに、①学校全体の子どもの状況についての情報を収集・発信する、②管理職に組織の改善案を提示する、③専門機関の特色を理解する、④学校全体の子どもや教師の援助ニーズを判断するというシステムレベルのコーディネーション行動が援助システム活性化に影響を与えることが示唆された。最後に、中学校、高校のいずれも、コーディネーション行動や援助チーム実践を支える学校要因は話しやすさ、援助チームの行いやすさ、援助体制に関する管理職の積極性で説明できた。また援助チームの有用性は1因子構造をもち、援助システム活性化は会議の適切な運営、援助サービスの見直し・提供、資源の活用で説明できた。そしてコーディネーション行動が援助チームの有用性や援助システム活性化に影響を与えることが確認された。また中学校においては校内委員会を中心とした援助チームの行いやすさが、高校においては援助体制に関する管理職の積極性がコーディネーション行動や援助チームの有用性、援助システム活性化に影響することが明らかになった。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

問題を持った生徒への支援は、担任教師が一人で行うのではなく、学年主任や管理職、養護教諭やスクールカウンセラーあるいは学校外の専門家・機関とチームを組んで行うことが効果的であることが分かってきた。そのようなチーム援助で重要なのは、チームを誰が、どのようにコーディネートするかである。本論文は、そうした教育現場での実践上の課題の解明に取り組んでおり、高く評価できる。また本論文は、上記のような数多くの知見を見出すことに成功したことも、評価できる点である。さらにそれらの知見は、次のような場面で生かすことができる。①コーディネーター養成の知見を提供できる。②中学校、高校のそれぞれの学校種に応じたコーディネーションのあり方を示すことができる。③個別の子どもに対する援助チームを行いながら、どのように援助システムを作るかというプロセスについて具体的な知見を提供できる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。